

外来生物調査プロジェクト Project A 報告

河川敷を中心に広がるナヨクサフジ

長谷川匡弘

現在博物館では、Project Aと称して、外来生物の調査を実施中です。今回はそのプロジェクトで調査中の外来植物ナヨクサフジを紹介したいと思います。

ナヨクサフジ (図1, 2:16ページ) はヨーロッパ、西アジア原産のマメ科の植物ですが (清水, 2003)、別亜種のピロードクサフジとともに緑肥として導入されました。緑肥というのは、ある作物の栽培前に、マメ科等別の種類の植物を栽培し、それを収穫せずに直接土にすきこみ肥料とすることをいいます。レンゲも緑肥にするために水田によく植えられていました。この緑肥に用いられていたナヨクサフジは、1941年に初めて記録されて以降 (久内, 1941)、元々使われていた畑や果樹園、水田以外にも見られるようになってきました。最近では、特に河川敷を中心に大きな群落が目立つようになり、生態系に与える悪影響も心配されるようになっており、環境省の「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」にも掲載されています (環境省, 2015)。大阪府では、時々茎や葉に軟毛の多い、ピロードクサフジも見かけますが、広く分布しているのは茎・葉に毛がないナヨクサフジの方です。

4月から5月にかけて大和川の堤防や河川敷では全体が紫色になるほど大きな群落が見られます (図1)。河川敷ではこれほど幅を利かせるようになったナヨクサフジですが、特に大阪市内では、河川敷を離れるとあまり目につきません。なぜこのような分布になっているのでしょうか。Project Aでは、まず分布状況を調べることから始めています。

まだ、調査の途中ですが、大阪市内では、分布はやはり河川敷が中心になるようです。しかし湿った環境が好きか、というところというわけでもなく、河川敷近くの公園や、道路の中央分離帯など乾燥した

ところでもよく育っています。ところが、大阪市内の河川敷から離れた場所にある群落では、果実の実り具合が河川敷と比べてあまりよくないことも分かってきました。

花の咲いている時期に観察していると、大和川河川敷ではシロスジヒゲナガハナバチが頻繁に訪花していました (図1)。ナヨクサフジの花粉を運んで受粉を行っているのは主にこの種類でしょう。同じ時期にはニホンミツバチも様々な花に訪花しているのですが、ナヨクサフジにはほとんど訪れません。おそらく、口の長さが足りずに、うまく吸蜜できないものと思われます。ちなみにナヨクサフジは花粉を運ぶ動物 (送粉者) が来ないとほとんど果実を作ることができません (長谷川, 未発表)。

大阪市内では、シロスジヒゲナガハナバチは河川敷で多く、そこから離れると少なくなります。河川から離れた都市公園でナヨクサフジが繁茂しない理由の一つは、この有効な送粉者が少ないことではないでしょうか。まだ、多くの地点での繁殖状況を調べる必要がありますが、都市部において河川敷でナヨクサフジが大きく増加している原因の一つは、運よくそこに適切に花粉を運んでくれるパートナーが豊富にいたことではないか、と考えています。

引用文献

- 久内清孝 1941. 採拾余録 (其十三). 植物研究雑誌17(9): 541-555.
- 環境省 2015. 「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト (生態系被害防止外来種リスト)」の公表について. <http://www.env.go.jp/press/100775.html>
- 清水建美編 2003. 日本の帰化植物. 平凡社.

<はせがわ まさひろ: 博物館学芸員>



図 1：河川堤防に大群落を作るナヨクサフジ。大阪市内の大和川河川敷にて（2015年5月8日）（本文は5ページ）。



図 2：ナヨクサフジに訪花するシロスジヒゲナガハナバチ。大阪市内の大和川にて（2015年5月8日）（本文は5ページ）。